

「3・11音のない大震災を取材して」

映像作家
今村 彩子

◎ドキュメンタリー映画を撮るようになった理由◎

私は生まれつき耳が聞こえない。ろう者だ。地元の小学校に通っていた時、友達のおしゃべりの輪に入ることができなかった。家に帰ってもテレビ番組に字幕がついていないため家族と楽しむことができず、寂しい思いをしていた。そんな時、父が私も楽しめる

るようにと毎週借りてくれた字幕付きの洋画から元氣と勇氣をもらった。しだいに私は映画監督になりたいという夢を抱くようになり、一九歳の時に一年間アメリカで映画制作を学んだ。帰国後、ビデオカメラを買ってドキュメンタリー映画を制作している。

私は「聴覚障害者」と呼ばれるけれど、私にとっては耳が聞こえないことが自然である。生まれた時からそうだったから。しかし、聞こえる人を基準に構成されている社会では、聞こえないことは「障害」であり、「聴覚障害者」と一括りされる。私は小さい時から自分が「障害者」と呼ばれることに対してずっと違和感を抱いていた。ろう者も障害のある人も生まれつきであれば、その姿が当たり前。今の社会が障害のない人に基準を合わせてつ

くれるから。しかし、聞こえる人を基準に構成されている社会では、聞こえないことは「障害」であり、「聴覚障害者」と一括りされる。私は小さい時から自分が「障害者」と呼ばれることに対してずっと違和感を抱いていた。ろう者も障害のある人も生まれつきであれば、その姿が当たり前。今の社会が障害のない人に基準を合わせてつ

くれるから。しかし、聞こえる人を基準に構成されている社会では、聞こえないことは「障害」であり、「聴覚障害者」と一括りされる。私は小さい時から自分が「障害者」と呼ばれることに対してずっと違和感を抱いていた。ろう者も障害のある人も生まれつきであれば、その姿が当たり前。今の社会が障害のない人に基準を合わせてつ

◎東日本大震災の取材で東北へ◎

そんな時に起きた3・11の東日本大震災。その日から、毎日、テレビや新



●プロフィール

今村 彩子 (いまむら あやこ)

名古屋出身 / Studio AYA代表

愛知教育大学教育学部卒業

大学在籍中にカルフォルニア州立大学ノースリッジ校に留学し、映画学科・アメリカ手話・アメリカろう文化を学ぶ。

現在、名古屋学院大学・愛知学院大学で講師をする一方、ドキュメンタリー映画制作で国内だけでなく、アメリカやカナダ、韓国など海外にも取材に行く。上映・講演活動もこなしている。

今村彩子監督公式サイト <http://studioaya.com/>

ツイッター @ayako_imamura

ブログで映画制作や日々考えていることを綴っています。

主な作品

DVD「ユニバーシティライフ

～ろう・難聴学生の素顔～

DVD「サラリーマンライフ

～ろう者と聴者の共に働く職場づくり～

映画「珈琲とエンピツ」 <http://coffee-to-enpitsu.com/>

CM「トキワ鉛筆「伝えたい」(トキワ/中部日本放送)

(第48回ギャラクシー賞・CM部門選奨作品受賞)

聞で東北のニュースが流れた。亡く
なった方や行方不明者の数が日々増
えていく。辛い気持ちでテレビや新聞
を読んでいる時、疑問が出てきた。

『東北にも、ろう・難聴者はいる。し
かし、彼らの情報がほとんど載って
いない。彼らは無事なのだろうか。支
援の手は届いているのだろうか。』伝
えることを仕事としてライフワークと
して活動している私にできることは被災
地にいるろう者の現状や声を社会に
伝えることだと思った。そして、震災
から十一日後の三月二日、宮城県を
訪れた。

仙台市内は閉まっているお店が多
く、ガソリンスタンドには長い車の列
が見られた。仙台空港へ行くと駐車
場の車が津波で押しやられ、街灯も
倒れ建物のガラスも割れて、無事な
ものが一つもない。自衛隊が車を片付
けていて、まるで終戦直後の光景を見
ているようだった。

まず、宮城県ろうあ協会の事務所
に行った。副会長の話によると、安否
確認、支援体制を検討し、進めている
が、ガソリンが足りないため支援する
ことができない。携帯メールもつな
がらず、安否確認がなかなか進まない
とのこと。ライフラインが断たれると何
もできない。支援しようにもなかなか

動けない状態だった。取材中にも余震
があり、私も不安な思いをした。

◎津波の警報が聞こえない◎

三月二四日、岩沼市の避難所にいる
二組のろう高齢者夫婦に会った。四人
とも顔の半分はマスクで隠れていて表
情が分からない。岩沼市に住んでいる
Kさん（七十二歳）は地震が起きた時、
近くにあるものにしがみつぎ、収まる
のを待った。貴重品をかき集めていた
ら、近所の人に身振り、津波が来る
から避難するように言われ、夫（七八
歳）とすぐ車に乗り、家から離れた。
その後、津波が来て家が流された。
もし、近所の人がKさんに伝えなかつ
たら、Kさん夫婦は津波にのみれ、死
んでいたとのこと。津波警報や避難の
放送が聞こえないために命を落とす
たろう者も実際にいると聞き、やるせ
ない気持ちになった。

同市で四〇年間理容店を経営して
いるSさん（七十一歳）と妻（六三歳）
もインタビューに応じてくれた。自宅
は新築で被害は少なく無事だったが、
Sさんは地震が起きた時、放送が聞こ
えず、近くの小学校へ避難することを
知らなかった。津波で外にも出られ
ず、一晩を自宅の二階で過ごした。翌

日、巡回に来たお巡りさんに身振り
で避難所に行くように言われて、初めて
放送があり、地元の人達は避難して
たことを知った。

インタビューを終え、Kさん、Sさ
んと一緒に住んでいた家へ向かった。
Kさんが昭和時代に建てた家はな
くなっており、地面のコンクリートや木
で間取りがかるうじて分かる程度。K
さんは涙を流して、家があった場所を
見つめていた。Kさん夫婦が長年暮ら
していた家と日常生活が津波で奪わ
れた。その心境はどんなもの
か・・・。ごめんね、ごめんねとKさ
んに謝りながら、私はただカメラを回
すしかできなかった。次はSさんの理
容店へ。ドアを開けると、泥水でぐ
ちゃぐちゃになった椅子やタオル、床
が目飛び込んできた。壁にかかっ
ている時計を見ると地震が起きた二時
四八分で止まっていた。

近所の人やお巡りさんに言われて
初めて津波のことを知ったKさんとS
さん夫婦は避難所でも情報を得られ
ない場面に遭遇する。放送が聞こえな
いため、食料や毛布などの情報がつか
めず、周りを常に見て一緒に動く。疲
れて眠ってしまったら、情報から遮断
され、食事や救援物資を得る機会を
逃してしまふ。常に周りを見ていなく

てはならず、ストレスが溜まる。Kさ
んは風邪をひいていて辛そうだった。
ろう高齢者は情報が得られない上
に高齢のため体力も衰えている。とて



▲倒れた街灯（仙台空港）



▲津波で流されたKさんの家の跡

も心労は大きい。真っ先に支援が必要な立場だが、聴者も自分のことで精いっぱい、気づかない。見た目は障害のない人と変わらない。私は「私は耳が聞こえませんが、分かるように伝えてください」と自分から周りに伝える必要がある。しかし、津波で家を失い、ショックで気力もなくなり、声にすることもできない。高年齢者の存在を知って欲しい。私はKさんが笑顔で暮らせる日が来るまで、被災者であることを社会に伝えていこうと心に決めた。

◎命を守る情報に格差があってはいけない◎

四月一〇日、私は再び宮城県に向かった。避難所に行くとKさん夫婦に会うことができた。先月の取材の時は顔が悪く、マスクをして咳き込んでいたKさんだったが、再会した時はお風呂から上がったばかりで顔色が良く笑顔が見られた。Sさん夫婦は自宅に戻ったようだ。Kさんはせきを切ったように「家も服も全てなくなつた。手話で話す相手がいなく、とても寂しい。寂しい」と気持ちを吐き出した。別れ際に手を握るとKさんは耐え切れず涙を流し、肩を震わせていた。

私は先月の取材では、涙を流しているKさんの姿を辛い思いで撮影し、Kさんの気持ちに寄り添うことができなかった。今回はKさんを抱きしめ、気持ちを共有した。「今日までホントによく頑張ったね。大変だったね」と何回も背中をなでた。

翌日は福島県いわき市小名浜でTさん（ろう者）と福島県聴覚障害者協会の会長を取材した。Tさんは「枝野官房長官の会見で手話通訳がついていると喜んだけど、テレビ画面には枝野さんだけ映し出され、何を言っているのか分からない。手話通訳も画面に入れて欲しい」と話した。会長は「聴覚障害者はテレビから情報を得ることが難しく、シーベルトなどの専門用語の意味が分からない。どのくらいの聴覚障害者が原発に関する正しい情報を把握しているかが心配」と話していた。

取材中にぐらりと地面が大きく揺れた。誰かにしゃがむように強く袖を引つ張られ、しゃがんだ。しかし、撮影しなくてはと恐怖で体が震えながらも立ち上がり、カメラを回した。揺れが収まり、「ああ、びっくりした」と皆、立ち上がった。会長が「三月十一日の時はこれよりももっとすごかった」と興奮状態で話していると、



▲「つなごろう日本」と題した寄せ書き



▲Sさんの理容店で撮影する筆者

スタッフが「サイレンが鳴っている！」「津波が来るかもしれない！遠くへ避難しないと！」と叫んだ。慌てて車に飛び乗り、小名浜から離れた。

私はサイレンが鳴っていることすら分からなかったことに愕然とした。ろう者は自分で自分の命を守ることができない。もし、聞こえる人に教えてもらわなかったら、サイレンが分からず、津波に飲まれていたかも・・・と思うと恐ろしくなった。これは一刻も早く解決しなくてはいけない問題である。命を守る情報に格差があつてはならないと強く感じた。

その晩、いわき市のホテルに泊まった。余震が続いている。部屋は私一人で、大丈夫かな。生きて帰れるのだろうかかと不安で考えが悪い方へ悪い方へ。夜になると暗いため周りが見えなくなり、停電になったら、更に見えなくなり、安全のためにどのような行動をとるか判断材料となる情報から遮断される。体は疲れていても頭が冴えてなかなか寝つかなかった。懐中電灯を枕元に置いて、いつでも脱出できるようにした。しかし、深く眠ることができず、早朝四時の余震で目が覚めた。カーテンを開けると青空が広がっていて心から安堵した。夜は毎日来る。闇は不安な気持ちを増幅させる。

被災地にいるろう者は命を守る情報を得られない不安な気持ち、手話で悩みをはき出す相手がいない辛い気持ちを抱えながら暮らしている。ろう者にも情報が行き届くようにして不安な気持ちを軽減し、ストレスを溜めないように安心して手話でコミュニケーションがとれる環境が必要だと痛感した。

◎地域の絆◎

八月に宮城県を訪れた時は復興が進み、瓦礫の山だった仙台空港が使えるようになっていた。Sさんの理容店は全国からの支援を受け、六月一日から再開。Sさんは自分の仕事ができるようになった。表情は明るく三月と比べるとまるで別人のようだった。しかし、その地域の人々は遠く離れた仮設住宅に移ったため、震災前と比べるとお客は少なくなったと話していた。

Kさん夫婦は五月半ばに避難所の方かい側に建てられた仮設住宅に移った。Kさんもお化粧をしていて最初は誰か分からなかったほど。笑顔で迎えてくれた。趣味である編み物やビーズ小物づくりをして過ごしていると作品を見せてくれた。

ろう高齢者の中には戦争の影響で

教育をきちんと受けられなかった人も多い。彼らは文字の読み書きが苦手で、筆談で意思疎通を図るのも難しい。Kさんもその一人だ。そのため地域から孤立してしまいがちだ。仮設住宅での高齢者の孤独死が報じられている現在、ろう高齢者の孤独死もあがりうる。それをふせぐためには日常生活の時から近所の付き合いが大切である。

宮城県ろうあ協会の副会長に今後の防災で大切なことを聞くと「地域の絆」と答えが返ってきた。地震が起きた時、停電になり、テレビから情報を得ることができない。携帯メールもつながらない。津波警報も放送も聞こえないろう者にとって一番頼りになるのは近所の人々。日常の時からお互いに顔を合わせて交流し、理解していくことが大切となる。今、Kさんの隣に住んでいる女性は以前からKさんと交流があり、身振りで情報を教えてくれる。

大震災が起きた日本で人の絆が見直されてきている。人と社会の間にある壁を壊すことができるのも絆。これからも被災したろう者に寄り添って取材をし、絆の大切さを伝えて誰もが安心して笑顔で暮らせる社会にしていきたい。